特 集Ⅱ 「森林と健康」 (臨床環境 3：98～102, 1994)

近代、健康 そして森

—ドイツ語圏における森林のレクリエーション機能の意義付け—

村 尾 行 一

愛媛大学農学部森林資源論教室

Modern Ages, Health and Forest

— on Significance of the Recreational Function of Forest in German Speaking Countries —

Koichi Murao

Forest Resources Programme, University of Ehime

要 約

(1) ドイツ人は森が好きであり、森についての知識が豊富であり、そして木材をはじめとする森林産物を好んで使用する。だから彼らの文化こそ『森の文化』であり、彼らの文明は『木の文明』といってよい。

(2) またドイツ人は清潔好きで、衛生観念が発達しており、個人レベルの健康から公衆衛生にいたるまで大変関心が強い。さらには環境問題の意識が高い。

(3) そしてこの二点が結合して、森林は生活環境の質を高め、個々人の心身休養に健康増進の効用が大きいと考えている。

(4) ドイツ人は、近代社会とは心身共に人を病ます社会であると認識して、森林におけるErholungを、さらに理想的には各種のKur, 就中Heilbadと結合した森林エアホールンクを、近代社会の病理に対する代表的な対策だと考えている。

(5) しかし、こうした森林観・衛生観念・健康意識は、決してドイツ人の人種・民族性といった超歴史的特質ではなく、あくまでも近代の所産である。前近代の彼らと近代の彼らとはまるで人種を異にするかの如く正反対の人間（社会）であった。

(6) 前近代のドイツ人にとって森は魔界であった。そして前近代のドイツは極めて不衛生的な社会であった。

Abstract

(1) Germans are known as lovers of forest. They are familiar with forest and prefer to use forest products such as timber. German culture and civilization may be termed as "culture of forest" and "civilization of timber" respectively.

(2) Germans love nettness. They have a strong sense of sanitation, with a great concern in individual to public health. Furthermore, they are fully aware of environmental issues.

(3) The combination of these two characteristics has produced an idea that improves the quality of their environment and that resting body and mind there greatly promotes their health.

(4) Germans have a clear conception that modern society tends to make people lose their health in both body and mind. They consider recreation in forest as a representative measure against diseases in the modern society; ideally, "Erholung im Wald" combined with various "Kur", especially with "Heilbad", is preferable.

(5) However, their perception of forest and sense of sanitation are both the products of the modern society. German people in the pre-modern ages were quite contrary to those in the modern days as if they were different races with each other.

(6) Forest was an evil zone for every German in the pre-modern times. In addition, Germany in those days was quite insanitary land.

〈key words〉 love for forest, modernization, sense of sanitation, forest as an evil zone, forest and medical treatment

愛林思想、近代化、衛生観念、森は魔界 森林と医療

別刷請求宛先：村尾 行一

〒790 松山市樽味3—5—7 愛媛大学農学部森林資源論教室

Reprint Requests to Koichi Murao, Forest Resources Programme, Univ. of Ehime, 3-5-7, Tarumi, Matsuyama, Ehime 790 Japan

初めに断っておくが、筆者が本稿で述べる際の『ドイツ』とは、狭義のドイツ、即ちドイツ連邦共和国だけではなく、スイスやオーストリア等を含めた広義のドイツ、つまりドイツ語圏を指している。本稿の主題に関しては、これらドイツ語圏の諸国は等質の文化を共有しているからである。とくに連邦共和国南部のバイエルン州とオーストリアは双子のようであり、またスイスともよく似ている。以上は一般的に指摘しうることだが、とりわけ本稿のテーマの典型的地域とはこうした南部ドイツ語圏なのである。

広く知られているように、ドイツ人は木と森が大変好きである。ドイツでは大きな都市でも、その周囲は勿論のこと、都市の内部にも大きな森林を、しかも数多く抱えている。人々はこれらの森林の中で散歩等をして時を過ごすことが大好きである。

土・日曜日や祝日は勿論のこと、ウィークデイでも昼休みの時や勤務時間後になると森へ散歩等をしに行く。さらには早朝・出勤前にも森で散歩やジョギングをする人が少なくない。

こうした事が春夏秋冬を通して、天候の如何を問わず、老若男女の別なく行われる。例えば、真冬の雪の降る夜でも母親が赤ん坊を乳母車に乗せて散歩をすることなど決して稀なことではない。その母親に尋ねてみると、「赤ん坊には冷たい清潔な空気を吸わすことが大事なのだ」と答える。

知人親友を招いてのホームパーティの際でも、デザートがすんだ後、誰言うとなく「新鮮な空気を吸いに行きましょうよ」ということになって一同うち揃って森に行く。それどころか食事の前に、ホスト側が「先ずは森に行きましょう」といったケースまで筆者は体験したことがある。これも冬の小雪が舞う日であった。

以上は普通の日のことである。周知の如くドイツ人は長い有給休暇・所謂Urlaubが与えられている。1箇所に2週間・3週間もの長逗留をする。その行先として最も人気のあるのが森林地帯と、仮に洋風湯治場と訳しておくBadekurortである。だから森林地帯の中にある・ないしは森林に包まれたBadekurortであるなら言うこと無し、である。

このようにドイツ人が森へ行くことを好むのは、そのことが楽しいからであり、また気晴らしになるといった心理的な動機と同時に、このKur云々からも理解しうるように健康によいと考えているからである。健常者の健康を維持し、さらには増進することから、心身両分野の疾病の治癒寛解や運動機能の障害者のリハビリテーションに至る広い意味でのErholungにとって森林は絶好の場だと認識している。そこで林学と医学との連携が生じているのである。

一見関係が薄いと思える医学と林学とは存外相似する点・共通する点・そして協力しあえる点が少なくはない。例えばドイツ、そして広くヨーロッパの（総合大学という意味での）Universitätは周知の如く伝統的に技術学の研究教育を行わなかったし、今でもその傾向がある。技術学は（単科大学という意味での）HochschuleやAkademie等で行われる。例えば工学、農学、音楽、美学等である。ところが例外的にUniversitätで研究教育される技術学が三つある。即ち法学と医学、そして林学である。この三者とも修習期間を含んだ資格取得の為の国家試験、しかもなかなか難しい国家試験が課せられる。

それだけではなく、医学も林学も19世紀に、社会の近代化の所産として、そして主としてドイツで成立した優れて近代的な科学である。そのメルクマール的人物として筆者は医学ではRobert Kochを、そして林学ではKarl Gayerを頭に浮かべている。Gayerとは1878年（明治11）にミュンヘン大学に林学科が設置された時に正教授として招聘された人物であって、ドイツだけではなく広くヨーロッパ全体とアメリカの林学・林業に決定的な影響を及ぼした人物であり、そして彼が確立した近代林学は今日ますますその正しさが明らかになっている。

近代林学については後に述べるとして、このミュンヘン大学というと看過できない人物がいる。それはKochより前の世代、Gayerとほぼ同世代で1876年（明治9）にミュンヘン大学医学部の正教授に就任したMax Joseph Oertelなのである。

彼は内科ならびに耳鼻咽喉科が専門であり、この耳鼻咽喉科を大学医学部の専門領域にした人だが、本稿のテーマにとってはこのことよりも彼が樹立した（フランス語系でいうと）"Terrainkur"ないし（ドイツ語系でいうと）"Gälendekur"という療法が重要である。これは心臓・循環器疾病の治療方法の一つであって、病状によって異なる傾斜角度の歩道を患者に歩かせるものである。Terrainkurを直訳すると『地形療法』となるが、『歩行療法』と訳す方がこの概念を正確に伝えると思う。

彼は1886年（明治19）初版の*Über Terrain-Curorte zur Behandlung von Kranken mit Kreislauf-Störungen*でこの療法を詳述している。そして今日この療法の有効性がより高く評価されており、各地のKurortの遊歩道がTerrainkurに合致したものになるよう、その設計・造成を医師が指導している。そして、森林においてこそ、この療法に適

した歩道が造成されえる・歩行が行える、ということは多言を要しない。だから、彼が医学と林学とを連携させた最初の人物と申せよう。

そこで次には、ドイツ人が、なぜ森林の中で時を過ごすこと、言い換えると森林のレクリエーション（Erholung）的機能・効用を高く評価するかを観てみよう。

一言で言えば、彼らは近代社会とは人を病ます社会・不健康な社会と認識している。そこで近代林学の今日の代表者であるスイス連邦立チューリッヒ工科大学造林学講座主任教授であるHans Leibundgutの*Der Wald in der Kulturlandschaft*（1984）によりつつ、このことについて述べよう。なお、ETHと略称されるこの大学はつい近頃までスイス唯一の連邦立大学であった。仄聞するところによると、フランス語地域にも連邦立大学を、という要望から最近ジュネーブにも設置されたとのこと。それはともかくとしてLeibundgutは次のようにいう。

「近代社会とは都市化・工業化した社会であり、そこでは益々より多くの人間が自然から疎外された、人口稠密な地域に住んでいる。そして、これまたますますより多くの人間が二・三次産業に従事している。それに伴って生活空間総体が不健康なものに変化した。即ち、騒音・排気ガス・煤煙・粉塵に包まれ、そして日照と運動が不足している。それに加えて労働は一面化・単純化し、石やアスファルトの上を歩くだけであって、倦み疲れやすいものになった。その結果、多くの人が身体的にも精神的にも——病人でないにしても——いわば半病人状態にある。

肉体的不健康さの例を一つあげると、下肢を常時動かさないでいることによる負荷の不断の増強、あるいは逆に仕事の際に下肢に全然負荷がかからないこと、固い舗装の道路、乗り物利用の増加、そして婦人の場合はこれに加えて解剖学的に無理な履物。これらのことが下肢疾患・歩行障害を恐ろしいまでに増大させている。

こうした状況・状態下にあって人々の健康を保持し、さらには各種疾病を治療寛解させる上で大きな効力を発揮するのが森林のErholung機能である。

即ち循環器系疾患、呼吸器系疾患、ホルモン系疾患、心身症、自律神経系疾患、伝染病に対する抵抗力の低下等々の治療にとって、森林の中で時を過ごし運動すること、自然を楽しむことによる心の安静、粉塵等を含まぬ健康な大気、そして歓び・楽しみ・気晴らし・気分転換等といった森林のErholung機能の効用が極めて大である。

森林には人間の多くの身体的および精神的疾病を予防し治療し本復させる働きがあること、とりわけ森林が醸す特殊な微気候（Schonklima）にこうした働きがあることを今日の医学は明らかにしている。さらに我々林学者は、それ以前から、森林が暑さ・寒さ・強風・乾燥した空気・強烈な日差しといった極端・苛烈な気象を和らげる作用のあることを明らかにしている。さらに森林は大気を浄化し、健康によい気体を出す。所謂フィトンチッドもその一例である。

こうした森林の作用・効用は、とくに幼児・老人・呼吸器患者、そして呼吸器疾患から回復しつつある人にとって喜ばしいことである。だから本格的な森林保養地（Waldkurort）が特に大変人気がある。

さらにいうと、健康状態に応じた道を無理なく、そして規則的に歩くことは、単に運動器官の健康保持の前提であるだけではなく、高血圧、心筋梗塞、動脈血行障害、静脈瘤、リュウマチ・心身症等多くの疾病の根本的治療の一環である。そして、自ら労りながらの軽い歩行からはじまって、強度の歩行や体操を交えての歩行即ちTrimm（-dich-）pfadに至る運動療法は、実際上森林において最も理想的かつ容易に行えることである」。

以上の効用は森林の中でも特に自然林に近い森林、つまりは最近は日本でも広く知られるようになった概念の近自然的な（naturnahe）森林が発揮する——と言うのである。

このように現代病とでも言うべき各種疾患を治癒寛解させるものであるから、森林は近代社会・現代社会にとって必須のInfrastrukturであり、しかも今後益々重要性が増大している、というのがドイツ人たちの全社会的全国民的コンセンサスなのである。しかも森林のこうした効用は森林自身の自然的な作用に多くをよっているのであるから、それ自体としてはさほど経費がかかるものでもないので、家計的にも国民経済的にも実に安上がりの保健・医療だ、と彼らはいうのだ。

このように森林のErholung機能を位置付けるのであるから、人々が森林に容易に行けること、人々が森林の中に自由に立ち入れることが大前提である。特に都会には、より多く森林を造成しなければならない。だからドイツでは、これらが実行できるようにすることが国家の責務となっている。そこでドイツでは森林の造成・保全を強力に推進することは勿論、さらに自然保護法・森林法等が、Erholungの目的でなら、国有林民有林を問わず他人の所有物であろうとも自由に森林に入ることが国民の権利であると明定している。

国家は、できるだけ多くの国民が気軽に森林に行けるよう道路や各種公共交通手段の整備に力を入れている。とりわけ自動車と自然とを対立的にとらえがちな日本的感覚からすると意外とも思われることはErholung林にはタップリと駐車場を設けていることである。

ここでドイツで成立した近代林学を簡単に紹介しよう。

周知の如く日本では「開発か保全か」といった二元対立型発想が社会を支配している。林業や観光は自然保護・環境保全と衝突するものといった考えが社会を支配している。だがドイツではこうした思考様式はとらない。

Gayer達が樹立した近代林学の特徴は、第一に森林が多様な機能をもつことを重視する。この諸機能を集約して表現する時は生産的機能・環境保全的機能そしてErholung的機能に大別するのが例となっている。しかもこれらの諸機能をできるだけ多く一つの森林で同時に発揮させることを原則とする。第二にこうした森林の利用が一度だけではなく、繰り返し繰り返し行えること。即ち"Nachhaltigkeit"（『保続』）つまりは森林利用の保続・持続可能な森林利用ということを大原則とする。第三にこのことは当該の生態系の特性に合致した森林の取扱をすることによって可能である。つまり合自然的（naturgemäß）な経営を行うこと。そこで第四に林木等の植生の種類も大きさも多様な森林を造成すること。言い換えると、同じ種類の・同じ大きさの林木だけからなる森林を造成し、かつ森林の区画を碁盤の目のような機械的・幾何学模様的なものにすることを拒否する。第五に森林の造成再生も天然更新法を主体とし、人工造林は補助的な作業と位置付けること。最後の第六に森林へのEingriff（侵襲・手入れ）をできるだけソフト・マイルドなものとすること。だから伐採は全林木を伐ってしまう皆伐＝Kahlschlag（文字通り禿山化するもの）、とくに大面積の皆伐を行わず、抜切り的な択伐を主体とすることである。

要約すると、いまだ"Ökologie"なる用語が造られる以前から、Gayer達は生態学的な発想を基礎として近代林学を構築した。そしてGayer達が樹立した近代林学が造成・保育する森林は、植生が多様であること・林道もくねくねとしていることによって、色彩を含めた林相が多彩で変化に富んだものとなる。だからErholungに、また国土保全にとっても望ましい森林となる。そして世界各地にいるGayerの弟子達が今日彼の理論と実践をより精錬・発展させている。

ところで、こうしたドイツ人の森林に対する価値付け・取扱方は、一般に言われるような「森の民ゲルマン」といった彼らの民族性によるものではない。筆者はこの種の超歴史的な彼らの特性とはどうしても考えられない。逆にドイツ人の森林観・森林利用が前近代（中世・近世）と近代では革命的に変化したことを知った。つまりそれはすぐれて歴史的な特性なのである。

第一に、前近代では森林は彼ら人間にとって魔界であり、危険と無法の世界であった。それを端的に示すものが例のグリム童話であって、有名な『白雪姫』では森の魔女である王妃の支配する世界、そしてこれもまた非人間的な存在の小人の世界である。『赤頭巾ちゃん』しかり、『ヘンゼルとグレーテル』しかりである。

以下、西洋史研究の諸先学の労作によりつつ述べて行く。

「森林は恐ろしい場所だった。そこには多くの野獣（狼・鹿・猪・熊・野牛）が棲んでいたが、中でも凶暴な狼が多数いて非常に恐れられていた。しかも野獣だけではない。キリスト教に追い立てられた妖精や異教の神々、さらには小人や魔女が潜んでいると信じられていた。要するに、森林は魔性のすみかにほかならず、人が好んで徘徊するような場所ではなかった」（本城靖久『馬車の文化史』、1993）。

そういう森林で仕事をする人たち。今日のドイツでは林業人の評価は極めて高く、医師と並んで「もっとも就きたい職業」であるのだが、前近代ではまるで事態は違う。例えば森番は賤民であった。当時賤民には幾つかのカテゴリーがあったのだが、さて森番はどのグループに属するかというと何故か「亜麻布織工、粉挽き、娼婦」のグループに入れられていた（阿部謹也『中世の星の下で』、1986）。

また前近代では森は文学、絵画、音楽といった芸術の主題にはならなかった。当時の人にとって森林は美ではなかった。芸術が森を主題にしだすのは近代になってからのことなのである（Leibundgut, a. a. 0.）。

次に当時の都市だが、人々は外の自然から物理的に遮断された城壁で囲まれた狭い空間に犇めいて生活していた。しかも人々は糞尿を窓から道路に投げ捨てるという始末で、だから道路は人間の糞尿プラス生塵プラス馬や豚の糞尿に泥が混じりあった状態の場所だったのだ（本城、前掲書）。道路と都市を流れる河川とは、悪臭を強烈に発散する下水道でもあった。これは華のパリとて全く同様である。

不潔不衛生的であったのは何も都市だけではない。田舎の旅館が、それこそ今日のそれからはとても想像しが

たい体のものである。特にひどかったのはドイツの田舎の宿屋で、大きな部屋の床の上に敷かれた藁にくるまって男も女も、宿屋の主人も召使も客もともども雑魚寝するという大部屋制が普通だった。しかも人間と一緒に牛・馬・鶏などの家畜が同じ部屋で夜を過ごすのも決して珍しくなかった（同）。しかも客である旅人は汗と埃にまみれていたのだ。そうした人々が素っ裸で同衾することもあったという。

すこしきれいな場所へ目を転じると、前近代を特徴付ける庭園は極度に人工的な幾何学模様のバロック式庭園である。そしてこれは王侯貴族だけの空間なのである。

1789年のフランス革命を転機とするヨーロッパ社会の近代化とは以上のことの根底的否定なのであった。

まず都市改造だが、それは第一に都市を囲む城壁の破却である。今日のウィーンやミュンヘンの美しい環状道路はこの城壁撤去の跡地に敷設されたものである。この城壁破却によって都市は物理的に外部の自然に対して自らを開放した。そしてそれだけではなく、自然を・特に森林を都市内に招き入れた。つまり従来のバロック式庭園の否定である自然景観式庭園（イギリス式庭園）の造成である。しかも一般大衆に公開したのであった。『公園』なる訳語はまことに適切である。今日ヨーロッパ各地の都市が広大な森林公園を多数擁していることは、昔あった森林が残っているのではなく、都市の近代化の一環として新たに造成されたものなのである。今では「森の無い近代都市など考えられない」ということになっている。そして森の美の発見が生じだし、近代的中産市民層を先頭に一般庶民も森への行楽を行いだした。さらに付言するとドイツ等の森林の絶対量・相対量（森林率）ともに我が国より少ないのであるが、それは、我が国のように近代・現代になって減少したのではなく、前近代とくに近世において激減したものを近・現代になってから人工造林等による回復した結果ようやく今日の数量に達したのである。いずれにしても近代・現代の成果なのである。

しかし、なんといっても顕著な近代化は、上下水道の完備等による衛生状態の文字通り革命的な向上である。

このように見てくると、以下のように纏めることができよう。

今日のドイツ人は「社会の都市化・工業化によって社会が不健康化した」という。たしかにそのような認識は間違いではない。しかし、このことを前近代との比較を含意するならば、それは誤解である。ドイツの今日の社会はかつてのそれに比して衛生状態が革命的に向上した、というのが客観的事実である。しかし、それでもなお彼らが近代社会・現代社会の不健康さを非難するのは、畢竟、社会総体の近代化・現代化にともなって、彼らの健康観・衛生観、さらには森林観念、つまりは主観に――まるで別の人種であるかの如く――大変革が起こったからだとしかいえない。

今日のドイツ人は嗅覚が大変鋭敏である。新鮮な空気frische Luftを強く求めたがり、またLuftkurortが大変人気が高い。そしてかつての彼らが今日の彼らと同じ感覚、つまりは同じ文化をもっていたとすると、彼らは前近代の社会では瞬時も呼吸ができなかったはずである。

こうしたことを踏まえて、森林のErholung機能・Kur機能は畢竟すぐれて近代的な社会的ニーズであると筆者は認識し、だから――勿論限定的ながら――『近代』を肯定的に評価しながら、森林と保健の関係の勉強を今後も続けて行きたいと思っている。